

企業参入でブドウ畑再生



ブドウの苗を植える従業員たち

塩尻建友 後継者不足補う

総合建設業と飲食店事業を営む塩尻建友（塩尻市宗賀、北沢勝己社長）が、市内の遊休廃農地の再生を図るため、ブドウの栽培事業を始めた。約6畝の畑で苗から植えて育て、将来は自社ブランドのワインを造る計画だ。市内では農家の高齢化と後継者不足で、栽培が放棄されたブドウ畑が増えつつある。担い手となる新規営農者の確保が容易ではない中、市内の異業種企業による農業参入は注目される動きだ。（柳 純一）

8日は広丘堅石の畑は10年くらいかかる」で、同社が営むカフェと説明した。レストラン・珈琲哲学の松本店と安曇野店の従業員7人が、ブドウの苗を植えた。塩尻志学館高校で長年ブドウ栽培とワイン造りを教えた元教諭の高山秀土さん（70）が指導し、「植えて3年で実がつき、収穫できるようになる。おいしいワインができる品質になるに

農業高校を卒業して安曇野店で働き、今後は栽培の中心的役割を担うという石田つぐみさん（24）は「スコップを持つのは高校以来」と笑顔を見せていた。主にメルローを栽培し、収量が上がればワインにして2店で販売する。酒類販売の免許も取得し、他の県産ワインの販売も手掛ける。計画だ。

同社はこれまでも塩尻産の米粉でピザを作るなど、地産地消に取り組んでおり、北沢社長は「ブドウ栽培は気の長い事業になる。企業の農業参入には高いハードルがあるが、遊休廃農地の解消に役立ちたい」と話している。